

第9次南極観測隊にインタビュー



えんどう やそいち 遠藤 八十一さん

プロフィール

1942 年滋賀県生まれ。京都大学農学部卒。

観測隊参加時、北海道大学低温科学研究所助手。雪氷観測担当。

その後、森林総合研究所十日町試験地主任研究員。

専門：雪氷学、理学博士（北大）

第9次隊南極観測隊に参加したきっかけを教えてください。
また、南極ではどんなお仕事をしたのですか？

北海道大学低温科学研究所において雪や氷の研究に従事しており、南極にも行きたいと思っていた。
9次隊の雪氷担当予定者が健康診断で不合格となり、私が参加することになった。

主な仕事は、昭和基地から南極点までの極点旅行において、氷床表面（深さ10mまで）の積雪の性質を調査し研究することであった。ところが出発後まもなく左腕を骨折、旅行隊を離脱したため、調査は藤原さんを中心に行われた。調査を解析した結果、氷床表面の積雪の密度や硬度、雪面の凹凸、年間降水量は氷床表面の地形、特に斜面傾斜に依存することが明らかになった。また毎夏、基地周辺の海氷上にできるパドル（池、水溜り）が、どのような過程を経て形成され、消滅するのかを明らかにした。

極点旅行について、印象に残っていることはなんですか？

南極点に向けF16地点を出発して6日目の朝は、地吹雪が激しく停滞することになった。重い荷ソリと大きなサスツルギに阻まれ、雪上車は連日夜遅くまで休みなく走ったが、5日で170kmしか進めなかった。そこでこの機会に、今までできなかった時間を要する積雪断面観測をすることにした。動力ドリルの操作を山本さんをお願いし、私は掘り出された雪の切り粉を除去していた。ふと気付くとドリルに手袋の紐が絡んでいた。「止めて」と必死で叫んだが、左腕を肩まで巻き込まれた。骨折4か所、治療のため昭和基地に送還、旅行隊を離脱した。この失敗により、村山隊長をはじめ9次隊の皆様には多大なご迷惑をおかけした。深くお詫びいたします。それから5ヶ月、往復5200kmの極点旅行を終えた3台の雪上車が、最終地点F16に姿を現した。雪上車に向かって駆けていくと、その屋根の上から「左腕を振れ」と隊長の声。何回も何回も思いきり腕を振った。



【雪上車 KD605 の前にて】